

## トラシュマコスの呪縛

——「正解」信仰の深層——

檜 垣 良 成

現代日本の若者たちが、〈対話〉することがきわめて困難な状況におかれていることは既に述べたところである<sup>1</sup>が、そこで言及した「正解」信仰の実情が殊の外深刻であることを痛感したので、再考察する。

### 1 トラシュマコスの正義論

「正義とは強者の利益にほかならない」（『国家』338c）という有名な言葉は、プラトンが自身の主著の登場人物であるトラシュマコスに語らせたものであるが、ここで語られていることを広い意味にとれば、歴史上の正義すべてに適用できるものであるように思われる。正しさは、思想の内容ではなく、その思想の持ち主が強者かどうかによって決まるということは、わかりやすい武力によって社会が支配されている場合に当てはまるのはもちろんであるが、いわゆる民主国家においても、「多数の力」が正しさを決めるのであれば、強者が大勢の集合になっているだけで、力こそが正義である点は同じである。それどころか、哲学的〈対話〉によって正義が探求されるような理想社会であっても、それが結局、「理屈の力」によって支配される社会であると見られるとすれば、トラシュマコスの言葉どおりの事態が生じていると言うことができる。「正しい」とは、「力がある」ということを言い換えた名前のようなものにすぎないというわけである。

正義についてのこのような理解は多くの学生たちに「そうだ！ そのとおりだ！」という強い納得を与える。こうした考え方が間違っていることを通常の意味で「客観的」に証明することはできない。世界のあり様を、人類の生き様をこのように解釈することは十分に可能であるし、そうではないという「科学的・客観的」な証拠など、どこにもない。私自身は、こうした解釈はとらないし、こうした世界観・人生観を信じないが、そのことを他人に押しつけることはできない。ただ、トラシュマコスの考え方をもっともだと思う人の奥底にも本人が気づいていないだけで相反する考え方が潜んでいるはずだと信じているので、そのことに気づいてもらえないかと試みしてみるだけである。

もしトラシュマコスの考えが真であるとするなら、どういうことになるであろうか。この考えが主張していることをごまかさずに受けとめるなら、「力の強い」者が行なうことは何でもすべて「力が強い」かぎりにおいては正しいことになってしまうのである。もちろん、力の種類を区別し、例えば「理屈の力」はより優先されるべき力であると考えてみ

<sup>1</sup> 拙稿「対話と真理 教育とモラルの復興のために」（筑波大学人文社会科学研究科哲学・思想専攻『哲学・思想論集』第40号、2014年）参照。まずは、本稿で問題としている〈対話〉の意味を確認のこと。

ることも一応できるが、トラシュマコス的に考えるかぎり、この優先性を正当化できるものは力以外にはないので、その力が他の力よりも強いということによってしか、その優先性を主張することはできないのである。「理屈の力」を優先すべしというという主張は、その力が結局はより強いはずだということを主張しているにすぎないことになる。そうだとすれば、理屈以外により強いものが現われれば、直ちに「理屈の力を優先すべし」という主張は正義の観点から見て誤りであることになるのである。トラシュマコスの考えのもとに立つかぎり、力に正義の観点から質的差異を設けることに正当性は見いだされえない。このことは、ジョン・スチュアート・ミルが快に質的差異を設けようと努力したが、「いかなる異常と思われる快樂も差別しない」という功利主義が本来もつ公正さ（功利主義の正義）を維持するかぎりにおいては、功利主義内部において快そのものの（量によらない）優劣を認めるその試みは誤りであると言わざるをえないのと同じである。

より印象的な表現を用いてトラシュマコスの考えの意味するところを説明するなら、「人が実際に実行できることは、そのかぎりにおいて、すべて正しい行為である」と言えるであろう。対抗する「暴力」であれ、説得による「納得させる力」であれ、その行為を押しとどめる別の力があれば、問題の行為は正しくないことになるが、実行できてしまう以上は、その力が実証されているのであり、その行為が「正しくない」＝「力がない」と言う余地は残されていない。これからなそうとしていることについて、「なすべきか、なさざるべきか」を通常の道徳的意味において悩むことは無意味である。何をしたいか、そして「それは実行できるか否か」だけが問題である。この世において人が行なうことは、それが実際に行われるかぎりにおいて、すべて「正しい」のであり、「正しくなかった」と言えるのは、あくまでも、それを圧倒する別の力が現われてからの事後的評価でしかない。その行為が実行された、まさにそのときには紛れもなく「正しい」行為であったということに異議を差し挟むことはできないのである。実行可能性を除いた行為の種類や内容に即して行為の「正しさ」を突きとめようとしても無駄である。「正しさ」とは「実行可能性」、それも実際に実現されるかぎりでの実行可能性以外の何も含意しない。「正しい」とされる行為の「内容」は不断に変化し続けるのである。

こう考えると、トラシュマコスの正義論とは実は或る特定の正義論であるというよりもむしろ、自然法則とは別の正義の法など存在しないとする立場であると言ったほうがより正確である。この世で実行（実現）できるか否か、「自然法則に適っているか否か」に行為の善悪を還元してしまう考え方であり、むしろ、自然の理と区別された正義（の理）の存在そのものを認めない立場であると言えよう。

果たしてこのような世界観、人生観に耐えうる人間はいるのか。トラシュマコスの考えを採用するということは、自分が強者にならない間は、強者と違う「正しさ」について心の中で思ってみる権利さえもたないということ。「みずから」認めているということの意味する。自分がどんな理不尽（と思われるよう）な目に遭っても、今の世間で非道だと思われていることのかぎりを尽くされたとしても、その相手が実際に「実行できた」（力を行使できた）以上、そのかぎりにおいて（実行できたという力こそが正義の証であるから）その人は100%「正しい」のであって、その相手に対して自分は「こんな間違ってる」と思うことさえしてはいけないということ自分を確信していることになる（最もミニマムな意味での「思想の自由」すら、みずから否定しているということになる）。

「そんな馬鹿な！心の中で思うぐらいは自由だろう」と思う人は、本人に自覚がないとしても実はトラシュマコス派ではない。もちろん、酷いことをされたら、そのことを「嫌だ」と思うことはトラシュマコスの思想の持ち主にも許される。しかし、こんなことは「正しくない」と思うことは、相手を上回る力とセットでなければならないということを自分に言い聞かせるのが首尾一貫したトラシュマコス派の姿勢である。

このような思想を真面目にもちうる人間がいるとは私には信じられない。そうした思想をもちうる存在は人を超えた超人であろう。トラシュマコスの正義論に賛成する人は、おそらく、「世間で正しいとされてきたことは強者の利益になることだった」という歴史（歴史は広義の自然法則に則ったものとして理解されがちである）的事実（とされていること）、ないしは、正義と「認められる」ためには力が必要であるという（おそらく「正義とは何か」とは無関係な）真実と、自分が本当にそれを信じて現に生きてしまっている正義についての思想とを混同してしまっているのではないだろうか？

こうした指摘によって、多くの学生は自分の考えを見直してくれる。「力」とは区別された「正義」はやはりあるはずだと自分が信じていることに気づいた気になってくれる。しかし、これで本当に問題が解決したわけではない。

## 2 「事実」信仰

「……も事実です！」という言い方をする人がいる。こういう言い方をする人が言わんとするところは何だろう。何か争点があって、その決着をつけるために持ちだすことが多いような気がする。あなたの主観的な意見など消し飛んでしまうような圧倒的な客観的根拠があると言わんばかりである。こういう言い方をする人の思考で懸念される点は、一人一人の思考を飛び越えたところに真実のようなものがあり、人々は四の五の言わずにそれに服さなければならないと説くことになりがちなところである。トラシュマコスの議論に抗して正義の存在に納得してくれた学生たちも、しばしば「事実」、そして「科学的真実」のようなものに訴えかける議論をする。そして「正義」や「哲学」の客観性はやはり「事実」や「科学的真実」に比べて弱いのだと区別する者もいるのである。

私がこの「事実」信仰の深刻さに気づいたのは、以下のリアクションを読んだときである。

私は真実というのは私たちがいたとしてもいないとしても必ずどこかに唯一存在し、それを私たち自身が見出すことでものにすることができると考えていた。だからこそ、正義というものは既に存在していて、それに関わるいわゆる理屈の力というものは私たちが正義を正義と認識するために感じてしまう力であるから、正義自体とは別でとらえるべきだとして、トラシュマコス派の意見に対して反対の意見を出していた。しかし、そもそも上記の真実とはいわば哲学的客観性に基づいているものだったのだろうか。そうではなくて、科学的客観性に基づいていたのだと私は思った。真実というものは多分私たちそれぞれ異なる可能性があるのだ。その中の同じ主題の中で異なる普遍性をもつルールは共存はできない。だからこそ我々が対話すること

「この普遍性を見つけ出すことが必要なのだ。だがこの対話をする上で科学的客観性を用いることはそもそも対話の場に立っていない。対話をするためには各々の自らの正義を口に出して、主張しなければならないのだと感じた<sup>2</sup>。」

この学生が冒頭で言及した「真実というものは私たちがいたとしてもいないとしても必ずどこかに唯一存在する」という考え方のどこに問題があるのか私には最初分からなかった。真実というものが私たちの合議や妥協に依存する恣意的なものではないこと、そして、現実には合意に至らずとも本来は唯一であることを担保する想定として、そのような考え方はむしろ不可欠なものだと思っていたからである。しかし、彼が「科学的客観性」と「哲学的客観性」とを区別し、前者を上述の考え方と結びつけ、「後者の客観性に基づく真実でなければ〈対話〉につながることはない」と論じたとき、はじめて言わんとするところが理解できた。「真実というものが人を離れて既にある」と思い込むことが、そういうものに対して人を「受動的」、「従属的」にしてしまい、みずからが〈対話〉に参入する必要性を失わせてしまうというのである。「真理は私たちとは独立に存在する」と言う、まわりの人を無視して「事実」や「科学的知識」に直接する（かつて「神」にすぎたように）ような考え方を助長してしまうようなのである。この考え方は、確かに相対主義とは異なり、唯一の真理を肯定できる考え方であり、一見、トラシュマコス的正義論とも異なっているように見えるのだが、自分の考えも他人の考えも「単なる主観」にすぎないから、それとは違うレベルの「権威」に従うべきであるという点では、やはり力（権力）への服従を核にもつものであり、トラシュマコスの呪縛から自由になってはいなかったのである。

そういえば、「正義」や「善」の存在に納得した後でも、「事実」や「科学的真実」の確からしさをそれ以上のものとする学生たちがいる。道徳や倫理学よりも、観察的（theoretisch）哲学のほうが格が上だと考えている学生がいる。彼らがその区別の拠りどころとしているのは、前者においては考察の対象が単に人の思想にすぎないのに対して、後者においては思想にとどまらずに客観的な事実ないし現実が取り扱われているように思われるということのようである。しかし、「事実」と呼ばれているものは本当に思想とはレベルの違う客観性をもつことが確認されているものなのだろうか。そもそも「事実」と呼ばれているものが本当に存在するかどうか、哲学的には十分に問題にできる事柄であるが、それは一先ず置いて仮に「事実」があると仮定しても、あなたが「事実」だと思っているその内容がまさに「事実」そのものと合致しているという保証はどこにあるのだろうか。その内容自体があなたの解釈、一つの思想にすぎないのではないか。その思想が事実と合致していることを保証するとされているものについて考えてみたい。

結局、「正義」や「善」などに比べて「事実」と言われているものや「科学的真実」とされているものが学生たちに確かに思えるのは、それらが権威づけられることが比較的容易であることによるように思われる。経験的、実験的証拠が挙げられると確かに確からしさが増すようにも思われるが、ヒュームやカントも言うように、経験だけがどれだけ集められようとも、それらの証拠が有限事例であるかぎり、何ら真理性（それは人間にとって

<sup>2</sup> 2017年11月2日「哲学通論」に対する学生 C. R. のリアクションより。なお、引用文中の傍点は引用者による。

普遍性や必然性を必要とする)が増すわけではない。何らかの法則のようなものを前提できてはじめて証拠は意味をもつ。しかし、矛盾律や因果律のような最も根本的な法則ですら、それが現実を支配するものであることを通常の意味で証明することはできない(逆に、これらによって一切は証明されている)。したがって、ある事柄が科学的真実であるとか事実であるとかいう、あたかも客観的事柄であるかのように思われる真理ですら、決して証明されたものではなく、最終的には各人の信仰に支えられているのである。ただ、矛盾律や因果律といった法則は多数の人が信じ込んでいることによって、科学的法則も実験や検証を繰り返しクリアーすることによって、(このこと自体は何ら真理性を増さなくはないのに)あたかも「各人(主観)に依存せずにそれ自体(客観)として確証されたもの」であるかのように権威化されているのである。そして、その権威に依存する形で真理性を唱えようとするなら、まさしくここにトラシュマコスの姿勢が見いだされるであろう。

権威は、その内容が本当に「事実」であり「真実」であることを保証するものではない。どれだけ権威を持っていた事柄でも、のちに「事実ではなかった」、「真実ではなかった」とされたことは、枚挙にいとまがない。ところで、既に「正解」と「真理」との区別で論じたように<sup>3</sup>、「正解」を求めることは「真理」の探求につながるとはかぎらない。否、むしろ〈対話〉を不可欠とする真理の探求を阻害することが多い。それというのも、「何が正解か」は既に決まっており、いわば閉じているので、必ずしも〈対話〉を必要としないからであるが、なぜ閉じることが可能かと言えば、「正解」が何らかの権威のもとにあるからである。大学入試センター試験の「正解」が大学入試センターによって決められ、個人が異論を唱えられるようなものではないのと同様に、「正解」と名前のつくものは、それを「正解」にする何らかの権威によって裏づけられているからこそ「正解」だと皆に納得を与えるのである。「事実」や「科学的真実」に特別な説得「力」を感じる場合、同様のことが起こっているのではないだろうか。それらを「正解」と見なしているのではないだろうか。「正解」信仰と「事実」信仰は同根であるように思われる。「事実」や「科学的真実」がもつ「力」は、それらが「真理」であることの証ではないように思われる。にもかかわらず、そうした力に固執するなら、その人は単に「正解」を求めているにすぎず、答えを閉じてしまっており、〈対話〉を求めず、「真理の探求」もしていない。

〈対話〉を不可欠とする真理の探求は、どこまでもオープンで常に暫定的なものである。これは探求者すべてに真理に対する対等な権利が与えられていることを意味する。しかし、それは同時に、探求者ひとりひとりに真理に対する責任も課せられているということでもある。「正解」の責任は客観化された権威の側にあり、自分にはないように思うことができる。「正解」はそれを得た者にとって見えやすい形で有用であり、分かりやすい利益をもたらす(例えば、大学に合格できる、よい成績がもらえる)が、「真理」の探求は、責任ばかり重くて、何の得にもならないようにも思われる。だから、分かりやすい利益を獲得することが前提であれば、そもそも「真理」の探求に関心など抱くはずもないのであって、自分が「真理」だと思ったことと違っていても「正解」に同調するのが、賢い選択である。しかし、「正解」にとらわれている人は、実は自由を失っており、権力におもねり、それに従属しているのだということには自覚的であってほしい。それも自分の主体的な選

<sup>3</sup> 前掲拙稿 44 頁を参照のこと。



択だと思ふかもしれないが、その選択のためにどんな目にあつてもその權威を裏切ることなく最後まで心中する覚悟があるのでもないかぎり、責任をもって〈主体的〉に選んでいゝるとは言えない。あくまで相手のせいになっているのである。〈主体性〉は、単に自分から行なう・選ぶということではない。責任を伴うものである。しかも、その責任は単なる自己責任ではなく、社会に対して請け負うような責任である。こうすれば善いと私が保証しますと言えるような責任なのである。この責任さえあれば、自分から選んだことではなくて与えられた役割を引き受けただけでも十分に〈主体的〉である。「正解」教育（そのくせ、自由や個性を称揚する）はこうした〈主体性〉を育ててこなかった。むしろ、權威におもねり（従属し）、人のせいにするばかり教えてきたのではないだろうか（それができなければ社会から孤立する人間をつくりだしてきた）。以下の学生はこうした事情をよく自覚している（あまりに事実にとらわれている学生が多いので、私が「むしろ事実がある保証などない」と展開したことを受けてのリアクションであるが）。

私たちは小・中・高と（それが何の科目であれ）「科学的な」授業を受けて、問題の正解を求められ、求めてきた。この姿勢は今振り返るととても哲学的とは言えない。今反省すると、正解と真理は自分の内で混ぜこぜになり、大学の今までの授業でも自分が考えていたのは「自分のうちから出す意見」ではなく「先生や周りが表情を濁らせないような正解（そうでなくても最適解）」であつたような気がするし、そういった意味では、先生が仰つたように本当の意味での真理の存在を認めていなかった気さえする。原因は明白なのである。（科学的）客観性やそうしたものに即した（ように見える）現に今ある事実、正解といった權威に飲み込まれ過ぎていた。すべての事柄について大きな權威が別のどこかで最適解を用意していることを信じていたために、自分の意見などは小さく、脆くどこにも支えを持たない不安定なものとして軽んじていた。「事実」は存在しない。権力では客観性は手に入らない。ましてはそれにすがつてゐるようでは真理などむしろ遠のいてしまう。個人の信条を問うような問題でも、意見を言う場では「証拠を出せ、証明してみろ。それも事実」に即し客観的に」と言われ続け、また自分個人が意見を言うときは「自信はないですが・・・」を頭に恐れ恐れ発言していた人を見かける機会は多かつた。しかし、それらの行為は真理を求めるときには必要がなかつた。「事実」は存在しない・・・このことを理解するだけで哲学はぐっと中身のあるものになると思う<sup>4</sup>。

何らかの問題の答えに対して、一方的に保証を求めてきて（「証拠を出せ、証明してみろ。それも事実」に即し客観的に）、みずからその答えを支えようとしたり、よりよい答えを説得しようとしたりしない人は、みずからの責任で〈主体的〉に問題に取り組もうとしていない人である。万人に「真理」に対する権利と責任があるという「思想の自由」をみずから放棄し、権力におもねり（「真理」を否定し「正解」に固執している）、従属的に甘い汁を吸おうとしている人である。つまり、たとえ本人が「真理」を探索しているつもりであつたとしても、みずからが〈主体的〉にその答えに貢献しようとはせず、受動的に

<sup>4</sup> 2017年11月9日「哲学通論」に対する学生 K. M. のリアクションより。

享受することばかりを考えている人は、本人が自覚しているか否かにかかわらず、トラシュマコスの生き方を実践しているのである。こうした人は、たとえどんなにうまく世間を渡り歩ききって幸福になった気でいるとしても、根っこにおいて（少なくとも「真理探求」欲求の充足の点で）空虚をかかえたままかもしれない。

逆に、たとえ現状においては真実（の表現）が各人にとって多様であることを認めたとしても、唯一の真実を求めて〈対話〉を諦めない人は、まさに「真理」を探求しているのであって、真に「真理」に責任をもつためには、安易に真実を一つにまとめる妥協に応じず、納得できなければ他者と異なる思想を唱え続けることも大事である。要は、表面上、真理の存在や唯一性を認めているかどうかはあまり重要ではなく、本人が〈主体的〉にふるまえているかどうか、〈対話〉を実践しているかどうかこそが、「真理の探求者」の目印となるのである。

### 3 「主観的」と「客観的」の転倒

最初の学生があのようなリアクションを思いつくきっかけとなったのは、その日の授業で私が「傘の例」を用いたトマス・ネーゲルによる「理性の事実」の指摘を取り上げたことであった<sup>5</sup>。私としては、この指摘を紹介することによって、真実というものが私たちに依存するものではないということを否定するつもりはなかった。ただ、真実というものが通常の意味で客観的に唯一存在する証拠を示すことはできないので、少なくとも「私たちがそういうものがあるということを前提して生きてしまっていること」が、少なくともあなたにとって確かではないですか、ということに気づいてもらうために取り上げた議論である。このことによって、真実というものは私たちが想定してるだけのものであるということが帰結するわけではなく、私たちが想定していると同時に、私たちが存在していても存在するものであるということは十分にありうることなのだが、まずは私たちの思想において対象化できないほどに起点をなしている〈主体的〉事実を見つめ直してほしかったのである。その甲斐あって多くの学生たちは、他人事ではなく自分自身が既に前提している思想が今問題になっているのだと気づいてくれる。しかし、今度は逆に、真理が私たちに全面的に依存すると考えるべきではないことのほうを疎かにして、主観の側だけの問題であるかのように思い込む傾向がある。下手をすると相対主義や多数決主義に舞い戻ってしまう危険もあるが、あまりにも権威主義が浸透した現状においては、それぐらいの理解でちょうどよいのかもしれない。むしろ、主観の側に徹して、相対主義を克服する見方ができることを次のリアクションから教えられた。

自分が信じていることが真実なら人の数だけ真実は存在する。一見論理的に何も間違っていないように見える。しかしながら自分の中で真実は一つなので、他人の真実の存在を認めた瞬間に自分の持っていた真実は真実でなくなってしまう。自分の真実が真実でなくなってしまうことを防ぐためには他の真実の存在を認めるべきでな

<sup>5</sup> 「理性の事実」の指摘については、前掲拙稿 35 頁以下を参照のこと。

い、ここは主観的・主体的になるべきである。一方で真実というものは客観的な普遍性が求められる。勘違いしている方は上で述べた主観的であるべき場面にて他の真実の存在をも認めるという言わば第3者の立場から客観的に物事を見ており主観的でないのと同時に、客観的であるべき普遍性という意味にて自分の真実が正しいと主観的になっており客観的でない。一言でいえば主観と客観の捉え方が逆なのである。この逆の捉え方は悪しき「みんな違ってみんないい」というセリフによって物事を第3者の立場から客観的に見てしまうことに起因しているだろう。このセリフつまり相対主義が成り立たないことをすでに理解したのであれば、この逆の捉え方を修正すべきでないだろうか。そして態度を修正できたら他の真実の存在を認めるべきでないという主観性・主体性において真理の探求に積極的に参加するべきである。自らの勘違いに気づきその態度を修正し、哲学をする上で基本的な態度である「対話」のできる状態になれることを望んでいます<sup>6</sup>。

このリアクションを読んで、「なるほど!」と思った。いわゆる相対主義というものは、個人個人の価値観を尊重しようというもくろみのだから、主観を大事に(偏重)する試みだと思っていた。しかし、この学生によれば、(もちろん、ネーゲルの議論を踏まえてのことだが)真実は普遍的で一つのものである(と実は相対主義を唱える当人も信じている)はずなので、相対主義的に相手の真実の存在を認めるということは、自分自身が真実であると思っていたことが真実ではなくなることを認めるということの意味してしまうのだよというのである。つまり、自分の主観を大事にしていない。第三者の傍観者の視点から、わるい意味で客観的に考察しているだけだというのである。自分が真実だと思っていることを大事にするのであれば、安易にこの意味での客観的な立場に立たずに、まずは主観的立場を死守できるか試みてみなければならない。しかし、もう一方で、その真実が「単に主観的」に妥当するものにすぎないとするなら、もはやそれは普遍的ではないことになり、またもや真実ではないことになってしまうので、それが他者にも納得してもらえるように〈対話〉を試み続けねばならない。あるいは、決して第三者の立場に遊離することなく自分の解釈を持ち続けながらも、ひょっとすると相手の言うことのほうが真実なのだろうかという視点も同時に持って、相手の言うことに納得したら潔く「自分の解釈」を同化させる姿勢が必要である。〈対話〉による同意の追求、これが適切な意味での「客観的」真理の探求である。大事なことは、同意をめざしながらも、絶えず自分の「主観的」な視点を大事にすることである。その上で「客観的」真理をめざするのが〈対話〉であり、そこで探求されているものが、真の意味での唯一の普遍的真理である。

上の学生が言うように、自分のとは異なる思想に遭遇したとき往々にして学生たちは、主観的視点を捨て傍観者的な意味で客観的に考察しようとする。また、自分の思想を表明するときに「個人的意見ですが……」などと閉じた独白的言い方をすることが多い。単に謙遜した言い方をしているだけで実際にはしっかり相手を説得しようと努めていればよいのだが、「私は……と思うだけです」と自ら孤立して閉じることが多い。これが、彼が言う主観と客観の捉え方の逆転である。「客観的考察」が自分を棚上げにする方便となり、

<sup>6</sup> 2018年6月19日「哲学通論」に対する学生S.T.のリアクションより。



「主観的意見」が他者にかかわらない口実になる。いずれにしても、自己と他者（社会）とを突き合わせることを避け、自分の責任を逃れる方策である点は一貫している。つまり、〈主体的〉でないのである。本来は、相手の意見を聞くときには自分の「主観的」視点を突き合わせることを忘れず、自分の意見を発信するときにこそ、「客観」の側との一致を模索しなければならないのである。

前稿でも触れたように、現代日本の若者たちは社会に対して受動的である（必ずしも、ひきこもって人と接しないという意味ではない）<sup>7</sup>。個人で能動的に社会や他人に（思想的に）働きかけることが少ない。空気に従順である。そのため、「自分の意見を言ってください」と促されると、「みんな違ってみんないい」と相対主義に逃げ、それが否定されて客観的な真理を相手にしなければならなくなると、〈主体性〉を封印して受動的に権力を嗅ぎ分け、それを享受するか、それに従属することに腐心し、そうした姿勢を他者にも強要する。これがわるい意味で「空気を読む」ということである。こうした現状においては、上の学生が言うような仕方ですば〈主体性〉を大事にすることを自覚してもらうのがよいだろう。

しかし、それだけでは真理の探求、〈対話〉の継続のために必ずしも十分ではないように思われる。私が「真実というのは私たちがいたとしてもいないとしても必ずどこかに唯一存在する」という考え方を否定しないのは、こうした想定が〈対話〉を継続するために重要だからである。〈対話〉を遂行して、もし関係者全員の合意が得られたとすれば、それで不動の真理に到達したと安心してよいのだろうか。あるいは、あなた一人だけが意見を異にしているが、残りの99%の人が合意しているとき、あなたが誤解していることは確実だろうか。否、残りの99%の人たちこそが誤解しており、あなただけが真理を掴んでいる可能性があるのではないか。真理は数ではないという、この可能性を肯定するためには、真理の客観性は、主観の側での合意に尽きるものではないと言えなければならない。あなたの〈主体的〉意見が意味あるものであり続けるためには、逆説的であるが、主観の側の合意に依存しない独立した客観的真理の存在が必要なのである。それに、真理の認識はどこまで行っても認識であって客観としての真理そのものではない。真理そのものは、私たちの認識（主観）に依存せず、それ自体で客観的に存在していると想定できなければならない。こうした想定のもとでは、たった一人だけが真理を見ている可能性が確保される。あなたは自分の理性を信頼してよい。（古来より真理を知る能力とされてきた）理性を信頼するとは、こうした他者の同意に依存しない〈主体的〉真理直観の可能性を信じることである（逆に言えば、他者の見解を「傍観者的・客観的」に考察する人は、自分の理性を信頼していない、自分をないがしろにしている人である）。しかし、他者も同様の理性を持っているはずなのだから、あなたは他者への説得と自分の見解の〈主体的〉な見直しを継続しなければならない。そのように他者の理性も信頼し続けるかぎりにおいて、たとえ数の上で劣っても、あなたの見解が真理である可能性が失われることはない。つまり、私たちの実践において、〈主体性〉は無条件で価値をもつわけではない。主観が客観的真理を掴んでいると主張できるためには、他者の理性を信頼して〈対話〉を継続し続ける必要があるのである。理性は複数集まっても誤解することがあるが、一個の理性で

<sup>7</sup> 前掲拙稿 50 頁ほか参照。

あれば、なおさらのことである。私もあなたも自他の理性を信頼して、ただし、決して人のせいにせず合意（多数決でも妥協でもなく）をめざすという仕方客観的真理の探求を進めるほかないのである。

そもそも、〈対話〉の目的は真理の探求である。その真理が存在しないのであれば、〈対話〉をする意味はない。現代日本社会においてのみならず、世界においても（議論・討論はともかく）〈対話〉<sup>8</sup>を忌避する風潮が広まっているのは、自由主義社会の浸透とともに、共通善を忌避することが当たり前となってきたことによるように思われる。自分がしたいこと（意志）を発言することは必ずしも共有できる真理の探求へはつながらない。日本においては、そもそも主体的な意志表示が乏しいのであるが、それが活発になったからといって〈対話〉につながるとはかぎらないのである。というか、主体性を大事にするという建前が広まることによってかえって〈対話〉＝客観的真理の〈主体的〉探求は廃れてきた。以前であれば、既存の社会的な善を自分自身の善にもすることを強いられ、自身の価値観を社会的な善と突き合わせて吟味する機会があった。傍観者ではいられず実は或る意味で〈対話〉していたのである。今は「それぞれで価値観をもっていいんだよ」と言われるため、社会と無関係に「単に主観的な」価値観（趣味的なものになりがち）をもって満足し、客観的な善や真理との接点がなくなったのである。思想的にも社会から孤立する人が増えている。〈対話〉も課せられず、自分の価値観が社会に能動的に接続しにくい。社会的ふるまいは〈主体性〉を欠き、従属的になりがちである。損をしてもそれを選ぶというような部分がないかぎり、真の〈主体的〉選択をしているのではない（こうした点が若者のメンタルヘルスや自信のなさに重大な影響を与えているように思う）。果ては「真理は存在しない」と、或る意味では現状をよく認識した主張を、よく考えもせずに（本当に〈主体〉と突き合わせてみることなしに）口走る者まで現われ、意識的にせよ無意識的にせよ、トラシュマコスの生き方にとらわれてしまっているのである。

客観的な普遍的真理の前提なしに〈対話〉の継続は不可能である。この真理は必ずしも実在していなくても、虚焦点として想定できさえすればよい。私にとっては、虚焦点としての想定があれば十分である。しかし、人によっては、単に虚焦点として想定しただけでは、「それって結局、単なる理念でしょ」と言って、真理が私たちを〈対話〉に駆り立てるインセンティブを与えないと考えることがある。本稿で見てきたようなトラシュマコスの思想にとらわれた人々たちである。その場合は、真理の実在の信仰が必要になるのかもしれない。もっとも、この信仰が結局トラシュマコスの権威に依存する形になるのであれば、元も子もないのであるが。

要は、表面上、真理の実在を信じているか否かは必ずしも重要ではなく、いかなる実践を伴っているかが問題なのである。例えば、ルターやジャンセニストは、人間の「選択の自由」を否定し、神への信仰を強調したが、彼らの実践そのものはきわめて（本稿で見てきたような意味で）〈主体的〉である。学生たちはしばしば神を信仰する者を「神にすがる者」として蔑むが、それが妥当であるとすれば、トラシュマコスの思考をしている者も同様に蔑まれねばならない。神への信仰をもつかどうかよりも、その信仰のあり方が重

<sup>8</sup> 討論と〈対話〉との違いについては、前掲拙稿 20-22 頁参照。

要であるのと同様に、表面上、普遍的客観的真理の存在を信じるかどうかよりも、従属的ではない真の意味で〈主体的〉な実践を真理の探求に際して行なえるかどうか肝要である。

### おわりに それでも「正解」信仰は続く？

最近ショックな事件があった。或る短期集中型の授業で、いつものように最後に公開のレポートを課したところ、私の別の授業の課題に答えている投稿があったのである。当人が受講していない授業であるにもかかわらず模範的回答がなされているので、剽窃ないしは替玉投稿を疑わざるをえず、本人を呼び出して事情を問うたところ、締切を（早いほうへ）間違えて慌ててネットで情報を検索したところ出てきた課題に答えたというのである。受講していない授業の課題によくここまで回答できたかと問うと、「先生が書いてほしいであろう内容を推測して書いた。よくできてましたか？」と悪びれずに言うのである。彼のそれまでの投稿内容とは明らかに違う傾向の文章であることは確かにそれで説明はつくが、やはり私には彼にこれだけの文章が書けたとは思えず、しかし、そうなると、これだけの模範的回答を書けるほど私の授業を理解した人物が、私が最も戒めるであろう行為（替玉投稿、まさにそこに書かれている模範的投稿内容に真っ向から矛盾する行為）を行なったことになり、とても虚しい思いにとらわれた。あるいは、もし彼の言うように彼自身が書いたものだとすると、私からすると、もっと深刻な事態である。単に単位のためにやむをえず人に任せただけではなく、自分自身が積極的に魂を売り渡し、みずから偽る文章をしたためたことになるからである。私がこれだけはしてはならないという行為を敢えて行なうことで彼は復讐をしたのかもしれないが、この復讐によって彼は救われるのであろうか。暗澹たる思いにとらわれる。もちろん、本人が認めない以上、これ以上真相を究明することはできないので、「自分が本当には思っていないことを書くのは剽窃と同じことだよ」とだけ言って彼を帰したが、彼にとって私の授業は何だったのかと問わずにはいられなかった。

これは短期の授業だったので、こういうことが起こったが、半期ないし一年継続して私の授業を受講した学生たちの投稿にはこういう疑念を抱かせるものはほばない（最後の投稿以前に受講放棄する学生はいる）。授業参加者全員に公開する形での投稿であるという点もあると思うが、さすがに私の授業で替玉投稿をしようなどという気にはならない程度には、授業の基本方針は伝わっていると信じたい。しかし、投稿内容がどこまで本人の〈主体的〉な見解であるかについては、やはり樂觀はしていられないと思う。授業で評価をつけるかぎり、意図的にせよ、無意識にせよ、「正解」的解答になってしまう恐れは拭い去れないからである。以下のリアクションはその問題をよく表現してくれている。

正解信仰というのは、承認欲求が強いことと似ているように思います。正解信仰も、承認欲求も、先生やら先輩やら、上の偉い人に認めてもらうこと、褒めてもらうことを目指します。先生に褒められて嬉しいからもっと頑張る、あるいは怒られて悔しいから、次こそは認めてもらうようにもっと頑張る。一見、何の問題もないように思えます。しかし、その場合、もしも先生がいなくなったら、つまりは、褒めてくれる人

や認めてくれる人がいなくなったら、きつと努力することをやめてしまうのではないのでしょうか。例えば、哲学通論のレジュメに自分のリアクションが載るのって、先生に認められた気がしてちょっと嬉しくないですか？（私は嬉しかったです。）でも、そこを目標にしてしまうのでは、2月くらいにこの授業が終了した後、きつともう対話のことも正義のことも何も考えなくなってしまうと思うのです。だって、授業が終了してしまえば、認めてくれる先生はもういないのですから、頑張ったって意味がないのです。だから本当は、褒めてくれる人も、認めてくれる人もいなくても、努力できることが一番いいのだろうと思います。そしてこれは、哲学の話に限ったことではないと私は思います。例えば、上司からの承認を求めて働くよりも、自ら考えて、新たな課題を見つけて働いたほうが、よりよい仕事ができるんじゃないかと思うのです<sup>9</sup>。

近年、リアクションで書いていた言葉とその言葉を書いた学生のその後の行動との間に比例関係が見いだしにくい傾向が強まっている。単なる承認欲求の充足だけで生きているのではないかと疑わせる学生の割り合いが増えているという実感がある。「褒めてくれる人も、認めてくれる人もいなくても、努力できる」ためには、身近で具体的な人間の承認だけに頼るわけにはゆかない。「〈主体的〉に探求するしかないものではあるが、それ自体は客観的と思われる真理ないし善」の存在を信じているとでも表現されるような実感を各人がもつことが肝要であるように思われる。このことは別に、本人が「私は人間主観から独立した真理の実在を信じています」という明確な自覚をもたねばならないということの意味するわけではない。身近な人、出会った人との関係を大事にすることだけを意識しているような人の心算にもこの実感は十分見いだしうる。それどころか、表現上は「私は真理の存在など信じていない」と明言している人が、私から見れば、紛うことなく真理の探求を実践していると思えることもある。要は、人のせいにはしない生き方、それでいて孤立しない生き方ができているかどうか、真の意味で〈主体的〉な実践がなされているかどうかである。人は孤立して生きてゆくことはできないが、身近な人の具体的な承認だけに頼っては、依存的になりトラシュマコスの思考に陥りかねない。観察的（theoretisch）にも実践的にも「理性を信頼する」とでも表現されうるような心の状態が必要なのではないだろうか。本稿で見たほどの「正解」信仰と「真理」の不在のただ中にいる学生たちが真に〈主体的〉になることは至難の業である<sup>10</sup>。こうした〈主体性〉の問題を決して客観的真理の探求をないがしろにすることなしに（というか、何らかの形で客観的真理や社会的善を信じることなしに真の〈主体性〉を獲得することは不可能である）改善していくことが、現

<sup>9</sup> 2018年10月16日「哲学通論」に対する学生A.T.のリアクションより。

<sup>10</sup> 〈主体的〉であることの難しさについて次のように語る学生もいる。「今まで、授業を受けてきて、……隷属的でなく自由に考えようと努めてきた。しかし、……現時点で、〇〇と考えて、〇〇に責任を持って行動していたとしても、自分に不利益のある状況に変わってしまったら、ころっと意見を変えてしまいたい……そうであるならば、私は責任を持てておらず、結局は自由ではなかったということになる。頭ではわかっていても、実際に思想の上で自由に行動することは難しい。そういう意味でも、「呪縛」なのだろう。私自身、何回も授業で気づかされながら、少しずつ自分の態度を改めていっている（はずである）。一気に変えることは難しい。「呪縛」はかなり深く、対話を「繰り返す」ことが、必要になるはずだ」（2018年12月11日「哲学演習」に対する学生K.H.のリアクションより）。

代日本社会における最優先課題であるように思われる。

真理の探求は〈主体的〉であるべきであって決して依存的であってはならないが、真理そのものが私たちに依存するわけではない。それが、理性を信じるということではないだろうか。どうすれば、自分自身の理性を使用する勇気をもって「決して他者（事実も含む）のせいにせずに自分自身が責任をもって他者を説得したくなるようなこと」を、他者の理性も信じつつ〈対話〉を通じて探求し続けられるようになるだろうか<sup>11</sup>。

\* 本文から分かるように、学生たちとの〈対話〉からとても多くのことを学んだ。特にリアクションの公開にて本稿をリードしてくれた学生たちには厚くお礼を申し上げたい。

<sup>11</sup> 本稿の草稿を読んだ学生から「客観的真理の〈主体的〉探求」のためには、むしろ「無私」な態度が有効なのではないかと指摘を受けた。一本とられた形である。「自分の意見によって自己を表現しているように思ってしまう……だから自己＝自分の主張を守るために、よくない意味で「客観的に」なり、「正解」を探そうとする。……自己＝自己主張を守りはしたのだから、自己に責任を持ったと思ってしまう。社会がよくないのは、それを支える権威に問題があるからというだけになってしまう。自分が不遇なのは、社会が自分に責任を持ってくれないからというふうになってしまう。……自己のとらえ方が違っているのに、自己に責任を持つということも違ってくる。ソクラテスは……自分の意見や知識や頭の良さをひけらしたくて対話をしたのではなく、対話の主題を本当に知りたい・理解したいと望んだからこそ対話をした、つまり自己主張という意味での自己を捨てて、「無私」な態度で哲学に臨んだ。そしてそういう時にこそ本当の自己が現れるのだと理解していた。……真理の探究に主体的であるというのは、「無私」な態度で真理を探究することだと思います。……この探究の中で見えてきたものに、つまり本当の自己に、責任を持つ。その時はじめて「私」は「私」であり、人間であり、自由であるのだと思います」（2018年12月25日「哲学通論」に対する学生 G.H. のアサインメントより）。



## The spell of Thrasymachos —— The cult of a “correct answer” ——

Yoshishige HIGAKI

The purpose of this paper is to describe the deep structure which the cult of a “correct answer” has in the classrooms in Japan. “Correct answer” and “Truth” are different. The “correct answer” is closed under an authority of some kind. The “truth” is open to every rational being. In the latter, a “dialogue” is indispensable. However, in the former it is not necessary. The cult of a “correct answer” and the hate for a “dialogue” in Japanese young people means the “passive obedience to authority” or the “abandonment of autonomy”. The autonomy recuperation without the abandonment of the search for objective truth is one of top priority issues in contemporary Japanese society.